



堀川真理さん

新潟県公立中学校教諭 学校心理士
ガイダンスカウンセラー サイコドラマ
マ新潟主宰 元CAPスペシャリスト

CAPの効果って？ 現場の教師に聞く



私の友人の息子さんが、いじめによる自殺をした。信じられなかった。報告を受け夢中でお通夜に。そこで見たものは、憔悴しきった友人とその家族、校長と担任への怒号の渦巻き。亡くなった息子さんはどんな気持ちでそこに眠っていたのだろう。いや、眠ってなどいない。どんな気持ちでその光景をまざまざと眺めていたのだろう。

私はその怒号を思わず止めていた。担任の先生の腕をとり「この人たちだけが悪いわけではないんです!」と。祖父の親戚の方が「あんた誰だね!!」と私に叫ぶ。私が答える前に、喪主である友人が「この人は本物の教師だ! この人のように真剣に教師をやれ! この人から学べ!!」と叫んだ。

次の日の告別式。出席の予定ではなかったが、急遽出席した。その理由は、今度は担任の先生が心配だったのだ。この担任の先生は死ぬんじゃないか。生きていけないのじゃないか、と。私にできることなら何でもしたいと思い、同席した。その先生からのメールに「堀川先生からの温かい抱擁と言葉がけが無かったら、今頃どうなっていたかわかりません」とあった。

私は教師である。教師としていじめ問題を最重要事項として、渾身で戦ってきた。すべてとは言えないまでも、多くのいじめやいじめの芽を食い止めてきた自負はある。しかしそれには自分自身の存在をかける必要がある。1mm手元が狂ったら大事に至り、自分自身も大きな痛手を負う。私自身、それで精神的に病み、3か月の病気休暇を取得したことも

ある。幸い3か月で再起できたが、一生の病を得てしまう人もいる。そのくらいの覚悟が必要な事項なのだ。

自分自身が心身ともボロボロになるかもしれない。それでも立ち向かう勇気を私はもっている。それは長年の教師キャリアとカウンセラーとしての活動と知識。私の活動を全面的に信じてバックアップしてくれる仲間と家族、そして生徒たち。保守的な体制にも食って掛かる気概。それがあって初めてもてる勇気だ。

そしてもう一つ重要なこと。私の息子が障がいを得てこの世に生まれ、特別支援教育を受けたこと。そのなかで普通学級にいる子どもたちに3度は大きないじめを受けたこと。我が身を裂かれるより辛いことだった。母として捨て身で学校と戦ってきた。もちろん父もともに戦った。目の前の子どもたちには親がいて、その親子の痛みを我が事のように感じるのだ。どんなに辛いか身をもって知っている。

CAPとの出会いは20年近く前。人権について学ぶ途上で出会い、ロールプレーヤーとしてCAPプログラムを行ったことが何度もある。「No」「Go」「Tell」を知った子どもたちは力を得る。小さな力関係は自分で打破できるようになる。大きな力関係は大人を信頼し、相談をしてくるようになる。この子どもの力こそがいじめ問題解決の端緒となる。CAPの必要性和重要性を強く感じる。

子どもたちがいじめによって心と体と命を傷つけられない学校を、切に願いながら日々邁進している。



新発田市立豊浦中学校
校長

森谷 優子 さん



CAPの効果

CAPの子どもワークショップがあった翌日、廊下にいた子どもたちに、昨日のワークショップはどうだったかと投げかけた。一人の男子生徒が、実は、自分も似たような痴漢体験があったと語った。今まで誰にも言っていなかったけれど、昨日のワークショップがあって、終わってから、CAPの人たちに話を聞いてもらって、何だかすっきりしたと話してくれた。続いて、隣にいた女子生徒が、学校で、各教科の勉強以外に、いろいろな物事の対処法が学べるなんて、とてもためになったと語った。どんなところがよかったのかと聞いてみると、実際に具体的な場面設定があり、全員がロールプレイをしながら練習したところがよかったという。自分にとって必要な学習だったと言った。二人の話に、周りにいる子どもたちも「うんうん」「わかる」とうなずいている。

子どもの頃は、あれは何だったのだろう!?と思うような体験をすることがある。誰にも言えないまま、小さな傷になっていつまでも残ることもある。

私もそうだが、とかく教員は、そのことくらいの内容は校内でやれるのだから、何もわざわざ外部の方に来ていただく必要はないと考えてしまいがちである。しかし、学校としては、「〇〇については、学習したという認識」なのだが、子どもにすると「そんな学習はした覚えがないという認識」であることがままある。こんな時、外部から来ていただくことの価値を感じる。CAPのワークショップは、子どもにとって残る、伝わる学習なのだろう。私自身も大人ワークショップ、教職員ワークショップを体験し、敢えてやってみる事のよさを体験した。

さて、ここからが大切である。学校は、CAPで得た学びを単発で終わらせるのではなく、様々な場面、それぞれの教職員が、繰り返し「安心・自信・自由」と言い続けたい。CAPのワークショップが終わった今、これからが本当のはじまりである。



新発田市教育委員会教育長

工藤ひとし さん



「子どもは未来の宝物」

未来を担う子ども達を取り巻く環境が大きく変化する中、どの子にも「この世に生まれてきて良かった。」と思ってもらえる環境づくりが重要である。しかし、現実には後を絶たないいじめや児童が連れ去られたり襲われるという、安心・安全な教育環境が脅かされる痛ましい事件が相次いでいる。いじめ対策、通学路の安全対策が問われているが、それと同時に子どもたちへの人権教育、安全教育の必要性が益々重要になってきている。子どもを暴力から守るためには子ども自らが考え行動することも重要であると考え。いじめの被害者のみならず、いじめを見ても止めることが出来ないで悩んでいる子を救わなくてはならない。さらに、危険を自ら察知しその場から逃げるなど、防御することが出来る子を育てなくてはならない。もちろん、学校で教育は行っているが、大人も子どもも、教師も家族・保護者も地域住民も、一緒になってやらなくては、浸透し子どもの行動は変わらない。子どもが変わるにはまず大人が変わ

～CAP と出会って～

らなければ変わらないとよく言われているが、まさに共に勉強することである。

そのプログラムが CAPであった。研修を受けたプロのインストラクターが直接子どもと親、そして教職員にワークショップ形式で一緒に考え、活動する研修を行う。その授業を学校教師が振り返りつつさらに日々教育活動に取り入れ子どもたちに学ばせていくと同時に家庭でも話題にすることで、いじめや暴力に対する人権意識を高めるとともに、自分の命や人権を守るために具体的な行動をとれるようになっていく。さらに、教職員や保護者は児童生徒からのSOSのサインを受け止め、適切に対応できるようになり、児童生徒が安心して大人に相談できる体制が整うようになってくる。私は実際に行いその効果を感じている一人である。新発田ではその願いが叶い全小中学校で取り組んでいる。

「CAP・にいがた」に感謝
—— 障がい児の「安心・自信・自由」
の権利をありがとう!! ——



江南高等特別支援学校

校長 佐藤 昇誠 先生

特別支援学校や特別支援学級ばかりではなく、小中学校の通常学級においても特別支援教育が浸透し、身体障がい児、知的障がい児、発達障がい児などの子どもたちとの日常的な交流が行われている学校が増えてきています。

現在、内閣府では「障がい者の権利に関する条約（仮称）」の締結に向けた検討・準備が進められております。その中で、教育においては、共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築が求められております。「インクルーシブ教育」は、「包括教育」とか「共生教育」とも訳されることがありますが、障がいのある子どもも共に学び合う教育のことです。

このような教育において最も大切にされなければならないことは、障がい児の人権であると思います。障がい児はいじめられ、権利を侵害されるリスクが高いことから、安心できる環境の下、自信が持てる取組を通して、自由な選択や自由な決定を行使できる集団づくりが必要であると思います。勿論、障がい児と共に生活する障がいの

ない子どもたちの人権意識の醸成も大切です。その上で、障がい児が、いやな場面では「いや」と言うことができるスキル、自分を守ることができるスキルなどが備わっていれば、自己の権利を侵害されるリスクは激減すると思っております。

このことに関するワークショップが、まさにCAP・にいがたの取組であります。特別支援学校や小中学校において、障がい児の人権を守り、障がい児が安心して生活し、自分の力を生かして自信を持って活動し、自分の意志で自由にのびのびと暮らしていけるような支援に取り組んでいただいております。

理事の石附幸子さんや事務局長の太田美津子さんには、常に事前準備を基に、障がい児の一人一人のニーズに合わせて工夫していただき、担任や保護者に対しても丁寧に対応していただき、心から感謝しております。

障がい児の「安心・自信・自由」の権利を大切にいただいている「CAP・にいがた」の今後のますますのご発展を祈念申し上げます。



●● Dear CAP ●●

私とCAP の出会い

～子どもたちの笑顔を支えようと
心を尽くしている方々～



「自分も大切に育てられている」
と気付いたとき、子どもはさらに
成長する

柏崎市立二田小学校
校長 吉田 存祐 先生

「ウオー」。子どもにこんな声が出せるのか、と圧倒された10年前。そのときが、私とCAPとの初めての出会いでした。

今年着任した二田小で、久しぶりに、ワークショップを実施する機会に恵まれました。勤務校のある柏崎市では、教育委員会の事業として、年次計画で、全小学校でのCAPワークショップを実施しています。

今回は、とても元気な2年生での実施。どこか心地よく感じる場所があるのでしょうか。とにかく、子どもたちは、チーフのことをよく聞くのです。最初は名札を付けることさえ拒否していた子どもも、いつの間にか胸に付けています。私はというと、これまで指導していたつもりでも、子どもにとっては初めて気付くことなのだ、ワークショップを参観しながら、妙に納得してしまいました。

さて、1つ例をあげてみます。私たちは、子どもたちに、「自分の命は自分で守ることが大切なんだよ」と説くことがありますが、果たして、その術を教えているでしょうか。身に付けさせているのでしょうか。

子どもワークショップでは、「かけがえのない自分を大切にしなければならないんだよ」と教えてくれます。そして、「心と体と知恵をもって自分を守る術」を教えてください。

保護者ワークショップでは、「子どもが話したことを全部受け止め、じゃあ何ができるかな。一緒に考えよう」と、接し方のポイントを示してくれます。

担任から、「まだ、自分で上手に断ることのできない子どもも、困ったことを友達や担任に相談するようになったんです」とのうれしい報告を受けました。保護者からは、「参加してよかった。『そうか』って思いました」との声が寄せられました。

私は、子どもたちが、「自分で自分を守る。可能な限り友達も守れる」力を身に付けると同じくらい、家族や大人が「しっかり見守る」ことが大切だと感じました。

そして、今の子どもたちにとって最も大事なことは、「自分も大切に育てられている」と気付かせることではないでしょうか。

